

早稲田大学 第二文学部 現代文 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	90分（現代文2問、古文1問、漢文1問）
特徴・その他	

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
(一)	評論	<p>佐伯啓思（京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専攻は社会経済学、社会思想史、政治思想）の「シリーズ〈現在〉への問い（第2部）地球サバイバル① なぜ環境破壊は食い止められないか？市場競争原理の徹底が要因 求められる新たな『公共性』の確立」（毎日新聞 2005年2月7日朝刊）からの出題。佐伯は『「欲望」と資本主義 — 終わりなき拡張の論理』（講談社現代新書、1993年）、『現代文明論（上）「西欧近代」再考 — 人間は進歩してきたのか』（PHP新書、2003年）、『現代文明論（下）「西欧近代」の帰結 — 20世紀とは何だったのか』（PHP新書、2004年）、『自由とは何か — 「自己責任論」から「理由なき殺人」まで』（講談社現代新書、2004年）等、受験生も（小論文対策として）読んでおきたい新書を数多く著している。</p> <p>読み易い問題文と標準的な難易度の設問との組み合わせで、殆どの受験生には容易に感じられるだろう。空欄が多いのでその前後は丁寧に読んでゆくことが必要である。ここ数年話題となっている「公共性」がキーワードとなっており、「個人の自由」との関係を巡る議論は入試問題集に取り組んだ受験生にはおなじみのものであるだろう。問題演習の際に、単に設問への効率的な対処法だけに拘泥せず、問題文の中で展開される議論の内容にも目を向け、興味を持って学習してゆくことが必要である。また、設問の選択肢中の言葉の意味についても、不明なものは辞書を用いたり先生に尋ねたりするなどして、出来るだけ正確に理解しておくことが望ましい（意味の分からない言葉に出会ったときに辞書を引くのは当然のことである）。つまり、きわめてオーソドックスな学習が、本学部の問題に対して有効だということである。</p>	標準
(二)	エッセイ	<p>長田弘（詩人）の「私たちがいる所・戦後60年から⑥ 不戦支えた『留保の言葉』（朝日新聞 2005年1月13日朝刊）からの出題。</p> <p>（一）同様、読み易い問題文と標準的な難易度の設問との組み合わせであり、入試問題としても易しい部類に入る。問七の脱落文挿入問題、問九・十一・十二の空欄補充問題は脱落文、空欄前後を丁寧に読めば容易に解くことができる。問八については、「本卦がえり」という言葉の意味を知らなくとも、本文中に何度も出てくる「六十年」という言葉から容易にその意味を推測できるだろう。問十四のような問題で失点をすることが致命傷になる。</p>	標準